
仮面ライダーW&T I G E R&B U N N Y

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW&TIGER&BUNNY

【Nコード】

N7975Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

風の吹く街・風都。

その風都を守るヒーローとして活動する戦士。

仮面ライダーW。

Wは風都で起こる怪現象を探っていた。

「同じ人物が複数あらわれる」

という現象だ。

そして捜査を続けるうちにあるドーパントにたどり着く。

「パラレルワールドドーパント」

平行世界の記憶を封じたガイアメモリだ。

悪の蔓延る街・シュテルンビルト。

そのシュテルンビルトを守るヒーローとして活動する戦士。
ワイルドタイガー。

シュテルンビルトでは過去にない大事件が起きていた。

「複数のバーナビーが悪事を働いている」

というありえない事件だ。

タイガーは捜査を続け、あるNEXTにたどり着いた。

「アルネイト・ライナス」

その能力は次元を超えてあらゆるモノを移動できる能力だ。

そして、数々の偶然が重なり、2人は出会ってしまう。

「仮面ライダーW、ハードボイルドに行くぜ！」

「ワイルドタイガー、ワイルドに吠えるぜ！」

時空を超えて闘うヒーロー。

始まります。

く現れたEノ平行世界のライダーく（前書き）

ダブルとタイガーのクロスオーバーとなります。

時空を超えて、とかは有り触れてるかもしれませんが。

よろしくお願いします。

「現れたEノ平行世界のライダー」

？仮面ライダーWの次元？

場所は風の吹く街・風都。

その街にある探偵事務所。

ドアを開ければ20畳ほどの空間に、センスを感じるインテリア。

数個の帽子のかかる隠し扉、タイプライターの置かれたデスク。

そんな鳴海探偵事務所で、2人の人間が口論を交わしていた。

「いい加減にしろ！お前も探偵なら手掛かりの一つくらいさっさと見つける！」

青いジャケットを来た、若い青年が叫んだ。

彼の名は照井竜。

風都署の警察で、仮面ライダーアクセルとして風都を守る戦士だ。

「そつちこそ！警察の方が得られる情報は多いだろうが！」

ネクタイに黒いハット帽子をかぶった青年も声を上げた。

彼の名は左翔太郎。

この鳴海探偵事務所の探偵であり。

仮面ライダーダブルとして風都を守る戦士。

現在、2人はある事件の情報交換を行っていたのだが。

お互いが殆ど有力な情報を得られなかったために言い争いが起きていた。

2人の追いかけるある事件とは「同一人物が同時刻にあらゆる場所で見かけられる」

という奇っ怪な事件だ。

2人はこの事件にガイアメモリが絡んでいると確信し、独自に捜査を行っていた。

そして現在に至る。

「フィリップの検索はどうした？」

「今も検索中だ、だが手掛かりが少なすぎて絞りきれねえみたいだ」
フィリップというのは翔太郎の相棒である。

「そうか・・・だがガイアメモリが関わっているのは確実だな」

「ああ、じゃなきゃ同じ人間が何人も現れるなんて有り得ねえ」

「俺は署に戻る。引き続き捜査を頼むぞ、左」

「任せとけ」

そう言うとき照井はドアに手をかけ、出ていこうとしたが。

「失礼するぜ」

ドアの向こうから誰かの声が聞こえた。

そして照井がドアを開くより先に、向こうから開いた。

「っ……貴様っ！」

照井は声の主に掴みかかろうとした。

「おっと」

声の主は軽々と照井をかわし、事務所内に入った。

その人物は照井も翔太郎も知る人物だった。

「よう、過去の仮面ライダー達」

声の主はそう言うと、腰にロストドライバーを当てた。

「お前は……大道克己……っ！」

大道克己。

不死の兵士NEVERとして改造された不死身の男。

ある事件で「エターナル」のガイアメモリを手に入れ、仮面ライダーエターナルとして闘った。

そして最後は風都で大事件を起こし、ダブルとの決戦の後に消滅した。

つまり、目の前にいるということは有り得ないことだ。

「お前、どうしてここにいるんだ………」

翔太郎は克己を倒した張本人なのだ。

当然の疑問と言えるだろう。

「どうでもいいだろ？そんなことは」

そう言い終えた克己は懷から何かを取り出した。

それは「エターナル」のT1ガイアメモリだった。

「ETERNAL！」

永遠の記憶を封じたガイアメモリだ。

ガイアメモリのボタンを押し、ガイアウィスパーから音声 flowed。

「変身」

ハ ETERNAL! ヽ

ガイアウイスパーの音声と軽快な音楽と共に、克己の身体が白い装甲で包まれた。

「仮面ライダー・・・エターナル」

克己は変身後にそう名乗った。

翔太郎は目の前の克己が本物であることを確信した。

「左！何をボーツとしている！」

照井もアクセルドライバーを腰に当てた。

ベルトが腰に装着され、懐から紅いガイアメモリを取り出した。

そしてボタンを押し、ガイアウイスパーから音声が流れる。

ハ ACCCEL! ヽ

加速の記憶を封じ込めたガイアメモリ。

「変・・・身っ！」

ハ ACCCEL! ヽ

ガイアメモリの音声とエンジン音のような音楽が流れる。

そして照井は紅い装甲に包まれ、仮面ライダーアクセルとなった。

「地獄から迷いでたかつ！」

アクセルは大型の剣、エンジンブレードでエターナルに切りかかった。

「見せてみる、この世界の過去のライダー」

エターナルはブレードを身軽に交わし、窓を突き破り外に出た。

この世界の・・・？

翔太郎はその言葉に疑問を抱いた。

そして、場所は工場跡。

「ハアっ！」

アクセルはエンジンブレードを力の限り振り回す。

エターナルは体技を駆使して、かわすか、受け止めるか。

とにかく防御に徹していた。

「いい感じだ。もっとこい」

挑発するかのようにアクセルに手招きをするエターナル。

「舐めるなっ！」

すると、アクセルは少し形の異なる黒いガイアメモリを取り出した。

「TRIAL！」

挑戦の記憶を内蔵したトライアルメモリだ。

「変・・・身っ！」

「TRIAL！」

カウントダウン音声の後にバイクのスリップ音のような音楽が響いた。

そしてアクセルの紅い装甲が弾け、黄色に。

そして青色に変化し、スリムな体型のライダーに変わった。

この超高速形態こそがアクセルトライアルだ。

「ほう・・・？面白いつ！」

エターナルは今度は攻撃に転じた。

小型ナイフのような形の、エターナルエッジを構えて切りかかる。

しかし、超高速で移動するアクセルトライアルには掠りもしない。

「そんなものが当たるかつ！」

アクセルはトライアルメモリの形を変化させた。

「TRIAL! MAXIMUM DRIVE!」

マキシマムドライブとはガイアメモリの力を最大限引き出す事である。

ストップウォッチ形に変化させたトライアルメモリのスタートボタンを押した。

「ハアアアアアっ!」

超高速で繰り出す幾発もの蹴りをエターナルに浴びせる。

少なくとも、目で追える速度ではない。

そして、数秒後にトライアルメモリのストップボタンを押した。

「9.9秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

それと同時に蹴りを止めた。

そしてエターナルは大爆発を起こした。

「一体どういうことだ・・・」

アクセルトライアルは倒したはずのエターナルに向き直った。

「いい腕だ。お前は合格だ」

エターナルの声。

しかし、その声はアクセルトライアルの後ろから聞こえた。

我に帰ったアクセルトライアルは後ろに振り向いた。

「貴様……どうやってかわした……」

「簡単だ。ダミーメモリのマキシマムドライブで幻覚に攻撃させただけの話だ」

ダミーメモリとは偽物の記憶を内蔵するメモリ。

自らの容姿を変化させることもできるが、万物を変化させることも可能だ。

「次は外さん……」

アクセルはトライアルを解除し、謎のアダプターをアクセルメモリに取り付けた。

「ACCEL! UPGRADE!」

そしてそれをドライバーに装填しようとしたが。

「待て。オレはこれ以上闘うつもりはない」

エターナルは変身を解除し、戦闘の意思がないことを示した。

「どついう意味だ！」

だがアクセルは警戒を解かず、変身も解いていない。

「そのままの意味だ。オレはお前たちの知る大道克己じゃない」

いきなりの停戦に加え、自らをまるで別人のように言う。

「・・・詳しく説明しろ」

事情の飲み込めないアクセルはとりあえず変身を解いた。

そして、克己は説明を始めた。

「まず、オレは確かに大道克己だが、お前たちの言う大道克己ではない」

「そしてオレはNEVERでもない。普通の生きた人間だ」

「生き返ったわけでもない。オレは別次元の・・・」

そこで一度区切りをつけた。

「平行世界の大道克己だ」

平行世界。

関係や性格や状況は違うが、同じ人物の暮らす複数の世界。

それが平行世界だ。

「そんな事が信じられるか」

「じゃあオレが今お前の目の前にいる事実をどう説明できる?」

「だが……」

「オレはこの世界のライダーを試しに來ただけだ。そしてお前は合格だ」

「試すだと?」

「ああ、今、この世界だけじゃない。全次元に危機が迫ってる」

「全次元……だと?」

次元の危機、それが示すのは少し昔の出来事と同じ結末。

ディケイドが防いだ世界の滅亡。

それがまたしても迫っているということだ。

「ああ。それを防ぐのにお前たちの力を借りたい訳だ」

「お前が世界を救いたいと……?」

照井の知る「大道克己」とは、極悪非道の大悪人。

世界を救いたいなど、思いもしない発言だろう。

「あんな・・・・・・・・」

克己は少し間を開けて続けた。

「・・・・この世界のオレがどんな人間だったかは知らないが」

「オレは別次元では正義の仮面ライダーなんだぜ？」

仮面ライダーエターナル。

この大道克己の変身するエターナルは別次元では正義のライダーらしい。

「加えて言うなら、オレの世界にはお前らはいない」

「なるほど・・・大体事情が掴めてきたな」

「そういうことだから。協力しろ」

「・・・・いいだろう。だが左はいいのか」

「アイツは初めから合格だよ」

克己は少し爽快そうに応えた。

「なぜだ？」

照井の質問に、克己は静かに応えた。

「だってアイツは・・・・この世界のオレを倒したんだろう？」

自分を倒せるくらい強ければ問題はない。

そっという意味なのだろう。

「なるほどな・・・」

「誤解を受けたままじゃ気分が悪い。お前からアイツに説明してくれ」

「分かった」

こうして2人の戦士は探偵事務所に戻った。

~~~~~

「おい・・・照井・・・」

翔太郎は克己を警戒している。

「興味深い・・・」

フィリップも翔太郎と共に事務所にいた。

「安心しろ、左、フィリップ」

照井は克己の一步前に出て事情を説明した。

そして翔太郎は理解し、納得した。

だが、フィリップは克己にうつか質問をした。

「なぜキミはこの世界に来れたんだい？」

エターナルに次元移動の効果はない。

エターナルの所有する26本のメモリにもそんな効果はない。

フィリップの疑問も当然と言える。

「パラレルワールドメモリ……」

「何だつて？」

「パラレルワールドというメモリを使う奴に飛ばされた」

「飛ばされた……ということは自分の意思でこの世界に来たわけでは」

「ない。単なる偶然だ」

「概ね把握した。では最後の質問だ」

フィリップは目をそらさずに聞いた。

「パラレルワールドメモリの所有者は、今どこにいる」

「……」

克己は言葉を濁した。

それが何を意味するか、フィリップには分かっていた。

「どこにいる？」

「ライダーの居ない世界……」

克己は続けてこう言った。

「ネクストと呼ばれる戦士が、平和を守る世界だ」

滅亡は始まったばかりだ。

そして、この出会いは序章でしかない。

これから続く、悪夢の……

く現れたEノ平行世界のライダーく（後書き）

こんにちは。

書いてみましたが、いまだに虎鉄さんは出ません。

次回は虎鉄さん中心エピソードになります。

次回・ヒーローWノ出会う戦士達。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7975z/>

---

仮面ライダーW&TIGER&BUNNY

2011年12月25日17時49分発行